

「模倣」の先の発明

— 『幼稚園教育要領』等で示された
「思考力・判断力・表現力等の基礎」の育成—

辻 和希

1. はじめに

「教育学」をフランス語に訳すと la pédagogie になる。この言葉はギリシア語の paidagogós に由来する。これは「子ども」を意味する pais の属格である paidos と「導く」を意味する ago が合わさったものである。paidagogós 以外にも pais からは様々な単語が派生して生まれた。その1つである paidia は「楽しみ」や「遊び」を意味する言葉である。「教育学」を意味する paidagogós と「遊び」を意味する paidia が同じ単語に由来することは、現代の幼児教育の文脈では非常に興味深い。

日本語の「学ぶ」と「真似る」が同じ語源から生まれてきたことは広く知られているだろう。職人の世界では師匠の技を「見て盗む」と表現することがある。このように表現するとき、弟子は見よう見まねでやってみて師匠の技を習得しようとしている。このとき、真似ることはすでにその技の学びになっている。「真似」は、職人技を盗むような「真似」以外にも、声真似や物真似など多岐に渡る。そして、「真似」は子どもの遊びの典型でもある。フランスの知識人ロジェ・カイヨワ (Roger Caillois, 1913-1978) は、自らの著書『遊びと人間』 (*Les jeux et les Hommes*, 1958) の中で遊びを4種類に大別している。その1つに、真似や模倣を意味するミミクリ (Mimicry) が挙げられている。例えば、おままごとやヒーローごっこなどがこのミミクリに分類される。真似を遊びの一種と考えると、「学ぶ」と「遊び」の間にも、paidagogós と paidia の間にあっ

た関係性を垣間見ることができる。

幼児期の子どもたちは遊びを通して学ぶ。これと同じ趣旨の言葉は幼児教育に携わる者ならば一度は聞いたことがあるだろう。そもそも、なぜ遊びを通して学びは成立するのだろうか。本稿では、遊びの中でも「模倣」に焦点をあて、フランスの哲学者コンディヤック（Étienne Bonnot de Condillac, 1714-1780）の思想とフランスの社会学者タルド（Jean - Gabriel de Tarde, 1843-1904）の思想を紐解くことで、現代の幼児教育の文脈の中で「模倣」が学びの過程で果たす役割について再考する¹。

2. 「幼児期に育みたい資質・能力」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

2017年に改訂された『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』（以下、この3つをあわせて『幼稚園教育要領』等）と示す。）の中で、「幼児期に育みたい資質・能力」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示された。「幼児期に育みたい資質・能力」は次の3つである。

- (1) 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」
- (2) 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」
- (3) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」²

ここで示された「幼児期に育みたい資質・能力」は、その後の学校教育で育成すべき資質・能力の基礎という位置づけである。2017年・2018年に改訂された、小学校・中学校・高等学校の『学習指導要領』では図1のように育成す

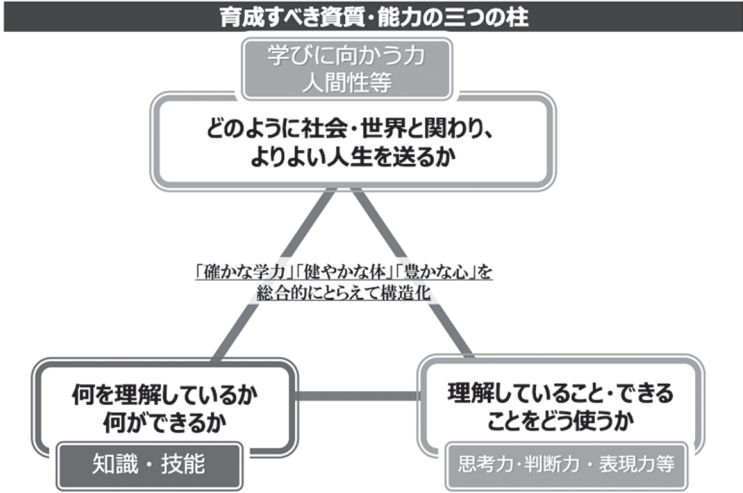


図 1 「育成すべき資質・能力の三つの柱」

出典：文部科学省「育成すべき資質・能力」

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_/_icsFiles/afieldfile/2019/09/30/1421692_7.pdf

（最終閲覧日 2019 年 11 月 18 日）。

べき資質・能力が示された。図 1 で示されている「学びに向かう人間性等」、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」の 3 つの資質・能力を見れば、「幼児期に育みたい資質・能力」がそれらの基礎に位置づけられていることがよくわかる。このように 2017 年の『幼稚園指導要領』等の改訂では、幼児教育と学校教育の連続性がこれまで以上に強調された。そして、幼稚園のみならず保育所においても幼児教育の位置づけが明確に示された。

「幼児期に育みたい資質・能力」は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の中で、さらに具体的な 10 項目に分けられ、示されている。その 10 項目は、「健康な心と体 / 自立心 / 協同性 / 道徳性・規範意識の芽生え / 社会生活との関わり / 思考力の芽生え / 自然との関わり・生命尊重 / 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 / 言葉による伝え合い / 豊かな感性と表現」から成る。

幼児期の終わりまでにこれらの姿が育っていることが望ましいとされた背景には、「小1プロブレム」がある。小1プロブレムとは、幼児教育と小学校教育の環境の変化に子どもが適応できずに生じる問題行動の総称である。例えば、問題行動の一種として、授業中に座ってられない、人の話を聞けない、集団行動ができない等がある。こうした問題行動の一因として、幼稚園・保育所での生活と小学校での生活の間に大きな変化があることが一般的には指摘されている。例えば、幼稚園・保育所では遊びが活動の中心であるのに対して、小学校では机に向かって授業を受けることが活動の中心となる。こうした生活の変化に子どもたちが対応できるように、幼稚園・保育所から小学校への円滑な接続が求められている。その際、幼児期の終わりまでに子どもたちの中で育まれていることが望ましいとされるのが、先に挙げた10項目である。

本稿では、この10項目の1つである「思考力の芽生え」に焦点をあてる。この項目に関して、『幼稚園指導要領』等の中では次のように示されている。

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる³。

上記の文から、思考力が芽生えた子どもの姿として、「新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするように」なった子どもを想定していることがわかる。この望ましい姿に子どもたちを近づけるために、新しい考えを生み出せるような環境構成や支援といったものが保育者には求められる。

それでは、新しい考えを生み出すために必要なものとは何か。それこそ、ま

さに「模倣」である。「模倣」があるからこそ、新しいものや独創性が生まれてくるのである。一見すると「模倣」と「独創性」は、「遊び」と「学び」のように対照的な言葉にも思われるだろう。しかし、実際は「遊び」が「学び」に通じているように、「模倣」も「独創性」や新しいものを生み出す「創造」へと通じている。以下では、なぜ「模倣」から独創性や創造が生まれてくるのかをフランスの哲学者コンディヤックの思想とフランスの社会学者タルドの模倣論を手掛かりに明らかにしていく。

3. 模倣から生まれる差異

「模倣」と「差異」は、本来、対照的な言葉である。「模倣」とは他のものの真似をすることである。「差異」とは他のものとの違いを指す言葉である。「模倣」から「差異」が生まれてくるという主張は逆説のように思われる。こうした逆説を主張したのが、コンディヤックである。

コンディヤックは主著である『動物論』(*Traité des animaux, Où, après avoir fait des observations critiques sur le sentiment de Descartes, et sur celui de M. de Buffon, on entreprend d'expliquer leurs principales facultés*, 1755)の中で、動物が持つ諸能力について分析し、他のさまざまな動物よりも人間が一部の能力で優位性を持っていると述べている。「全ての動物に共通する習慣の形成について」と題した章の中で、ヒトも含めたあらゆる動物が、「反省」を繰り返す経験を通して、行為を「習慣」にしていく過程をコンディヤックは説明している。

それぞれの動物は自分たちの身体構造に応じて、感じる快苦や欲求が違う。例えば、肉食動物と草食動物は、食欲を感じた時に食べるものが違う。あるいは、ヒトとホッキョクグマでは快適さを感じる温度が違う。これらの欲求や感覚の違いは動物たちの身体構造の違いに由来している。そして、この身体構造の違いからそれぞれの動物が感じる欲求にも違いが生じる。それぞれの動物は、各々

が感じた欲求を満たすために自己を変容させていく。ヒトの場合、空腹によって食物を求める。しかし、単に飢えを防ぐだけでは満足せず、味付けにこだわる。人間の舌は五味（甘味・塩味・酸味・苦味・うま味）を感じる。五味があることで、単に「何かを食べたい」というのではなく、「甘いものが食べたい」や「塩気のあるものが食べたい」という欲求が生まれてくる。このように人間の場合、その身体構造から複雑な欲求が生まれてくる。欲求が複雑であればあるほど、それを満たすためには、これまでにない発明や深い内省が必要になってくる。

コンディヤックは、『動物論』の中に「同じ種に属する諸個体は、模倣する (scopier) 傾向が低ければ低いほど、より一様な行動をとるということ。それゆえ、人類が互いにこれほど異なっているのは、あらゆる動物の中で最も模倣する傾向があるからということ」⁵と題した章を設けている。この章題からもわかるように、コンディヤックは、人類の多様性が模倣する能力に由来すると考えている。

人間を含めた動物は諸感覚に由来する欲求から習慣を作り上げる。コンディヤックは「習慣は自らの身体機能を働かせる欲求を必要とする。それゆえに、習慣の数は欲求の数に比例する」⁶という。ここでいう「習慣」は「習性」と読み替えることもできる。例えば、ノミは動物の血液を吸うことを習性としている。なぜ血液を吸うかといえば、食欲に突き動かされるからである。この例では、「食欲」が身体機能を働かせる欲求であり、「血を吸う」という動作が習慣・習性にあたる。五味を感じる人間とは違って、ノミが「甘いものを食べたい」と感じることはない。反対に、人間が食欲から「血を吸いたい」と思うこともない。ノミと人間では、その身体構造から生まれてくる習性（習慣）が違うのである。

ノミの習性は、いつの時代でも、どこであろうともノミ同士に共通する普遍的な習性である。ノミよりも複雑な身体機能をもつ動物にも普遍的な習性は存在する。ウシを例にあげても、日本で生まれ育ったウシとフランスで生まれ育ったウシの習性が大きく異なることはない。というのも、日本のウシもフランスのウシも欲求に大きな違いがないため、欲求から生まれてくる習性にも

大きな違いがない。

それでは、異なる時代、異なる地域に生まれた人間同士の場合はどうだろうか。同じ身体構造を持つ人間同士なら、ノミやウシと同様に普遍的な習性を持っていてもおかしくはない。コンディヤックは、「人間がばらばらに生き、考えを互いに伝え合うことができなかつたら」、他の動物と同様になると考えていた⁷。例えば、人間の乳児を考えてみよう。あらゆる時代、あらゆる場所で、乳児たちの習慣に違いはない。とはいえ、人間の場合、乳児から成長するにつれ、個体間での差異が目立つようになる。それは、コンディヤックの言葉を裏返せば、人間が他者と共に生き、考えを互いに伝えあつた結果である。そして、人間の模倣する能力が他の動物とは比べ物にならないほど突出していたからである。コンディヤックは次のように語る。

子どもたちは、生まれによって運命づけられた境遇の中で育てられ、自分の周りにいる人のすることを、その人がしていたようにするようになる。長い間、周囲の人はその子のために必要なことに気を配り、その子のためにあれこれと考えてやる。そして、その子は周囲の人が与えた習慣を身につけるのである。しかし、その子は、ただ一人の人だけを模倣するわけではない。その子は、彼に近づくあらゆる人を模倣する。それゆえ、その子が特定の誰かに似てしまうということはない⁸。

ここでコンディヤックが説明するように、人間の子どもは、自分が生まれた環境に応じた習慣を身につける。料理の味付けから宗教観といったものまで、周囲の人を模倣し、習慣として身につける。しかし、それは一人の人間を模倣するわけではない。父親のある部分を模倣し、母親のある部分を模倣する。あるいは、教師を模倣したり、友人を模倣したりするかもしれない。あらゆる人間を模倣することで、その子の習慣がパッチワークのように作り上げられてい

く。こうして完成した習慣は他の誰のものとも違う、その子独自のものになる。「人類が互いにこれほど異なっているのは、あらゆる動物の中で最も模倣する傾向があるから」とコンディヤックが主張するのはこうした論理からである⁹。

ここでは子どもが習慣を身につける過程が例として挙げられていた。しかし、子どもが習慣を身につける場面以外にも、「模倣」という営みは行われている。コンディヤックは、人類の積み上げてきた知識、いわば文化は「模倣」の連続によって形成されてきたと主張する。

まさに社会において、人間同士の間際立った違いというものが生まれるのである。社会のなかで、人間は互いの欲求や経験を伝え合う。つまり、お互いに模倣し合うのである。そして、ある世代からまた次の世代へと増大する膨大な知識を作り出すのである。 / すべての人がこの進歩に等しく貢献するわけではない。大多数の人々が、創意のない物真似屋である。つまり、発明家は非常に珍しいのである。とはいえ、発明家も大多数の人々と同じように模倣することから始めたのである。しかも、すでに出来上がったものに対して発明家たちが付け加えるものは、ほんのわずかなことでしかない¹⁰。

ここに引用したコンディヤックの言葉からは、万有引力の法則の発見で知られるアイザック・ニュートン (Isaac Newton, 1642-1727) が、論敵であるロバート・フック (Robert Hooke, 1635-1703) に宛てた手紙の中に残した次の一文が思い出される。その手紙にニュートンは「私がかなたを見渡せたのだとしたら、それはひとえに巨人の肩の上に乗っていたからです」¹¹と記した。先人の知識の集積が、ここでは「巨人の肩」というメタファーによって表されている¹²。ニュートンの言葉からわかるように、私たちの社会の進歩は、先人たちが残した知識の上に成り立っている。まず、私たちは残された知識を模倣する。次に、その知識に自分なりの付け足しを行ったり、あるいはその知識を否

定したりすることで、新たな発見をする。その発見は知識として蓄積され、次の世代へと引き継がれる。もし模倣する力がなければ、人類は漸次的な進歩をすることもなく、常にふりだしに戻されていただろう。

ここまで、コンディヤックの思想を紐解いてきた。そこに描かれていたコンディヤックの思想は、一種の机上の空論のようにも思われるかもしれない。しかし、フランスの社会学者タルドは、社会学の視点から「模倣」が人間の社会を基礎付けていることを明らかにした。タルドの考えは、現代ではほとんど省みられることが少なくなってしまった。しかし、彼の模倣論には現代でも通用する一定の妥当性がある。そして、それはコンディヤックの考えをさらに精緻に敷衍したものとして読めるのである。そこで次節では、タルドの模倣論を紐解くことで、「模倣」によって発明がなされる過程を再確認する。

4. 模倣から生まれる発明

タルドの模倣論に立脚して教育を分析した研究はほとんどない¹³。さらにいえば、幼児教育にタルドの理論を援用した事例は、管見の限り、ほとんど見あたらない。そもそも社会学の世界でタルドの模倣論が省みられることが稀である。同時代の社会学者デュルケム (Émile Durkheim, 1858-1917) と比較するとその差は歴然である¹⁴。幼児教育の文脈であり馴染みのないタルドの模倣論の要点を確認しておこう。タルドは主著『模倣の法則』 (*Les lois de l'imitation*, 1890) の中で、社会というものが模倣の伝播によって形成されてきたことを古今東西の事例を引用しながら証明しようと試みている。

「模倣」によって社会が形成されるとはどういうことだろうか。「社会」というものを一言で定義するのは難しい。なぜなら、「社会」と一口に言っても、この言葉は家族のような比較的小さい集団から国家という大きな集団までを指すからである。ただし、社会の特徴の1つを挙げることはできる。社会の特徴として、同一の社会集団に所属する構成員は共通の目的や信念、信仰を持って

いることが挙げられる。例えば、キリスト教ならその信仰によって1つの社会を形成している。日本の場合、『日本国憲法』の前文には、「日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ」とある。ここで示された理想や目的が、日本という社会の共通の目的である。それでは、キリスト教における信仰や日本における国家の目的といったものが、社会の誕生と同時に構成員間で共有されるかといえば、そうではない。タルドは次のように述べる。

そもそも、ここで取り上げた企図や信仰への一致、つまり、何千万、何億人の人々に同時に与えられたかのように思われる精神的な一致は、突然生まれたわけではない。では、この精神的な一致はどのように生まれたのだろうか。少しずつ、次第になされる模倣によってである。それゆえ、私たちはつねに模倣に立ち返る必要がある¹⁵。

世界の三大宗教に数え上げられるキリスト教であっても、その始まりはナザレのイエスの地道な布教活動であった。イエスの12人の弟子たちが彼の教えを学び（模倣し）、それを伝えることで、キリスト教は時代を越え、国を越え、広まっていった。

また、日本の場合、戦後すぐに民主主義の考えが国民の間で一斉に共有されたわけではない。『日本国憲法』が公布されると同時に、日本国民として目指すべき目的が共有されたわけでもない。そもそも民主主義という制度さえ、日本は米国や他の先進国の民主主義の一部を模倣した。そして、時間をかけながら、世代を超えながら、民主主義というものがひとまず日本には根付いていった¹⁶。とはいえ、民主主義が根付いていた国とそれが根付いていなかった日本のように、異質な両者の間での模倣は、何の下地もなしに行われるわけではない。異質な両者が共通の目的を目指すためには、「模倣伝播の一形態である教育によって形成されたあらゆる緊密な類似性」¹⁷が必要であるとタルドは考えて

いた。戦後すぐの1946年に、米国は第一次教育使節団を日本に派遣し、軍国主義の色が濃かった日本の教育の民主主義化を推進した。このことは、タルドの模倣論から見ても、日本の民主主義化の基盤を築いたといえよう。ただし、日本の民主主義は先進諸国のそれをまったく同じ形で模倣したわけではない。これまでの天皇制を一部模倣し、象徴天皇制という形をとることになった。これは天皇制と民主主義という双方の考えを模倣した結果から生まれたといえよう。

教育は教育する側も教育される側も意識的に行う活動である。いいかえれば、教育とは意識下で行われる「模倣」である。しかし、「模倣」は無意識にも行われるとタルドは考えていた¹⁸。無意識下で行われる「模倣」とはどのようなことだろうか。例えば、虐待を受けていた子どもが親になったときに、自分の子どもに虐待をしてしまうという世代間再生産論を聞いたことがある人は多いだろう。この場合、虐待を再生産してしまっている親は虐待のつらさを知っている。それゆえ、意識的に虐待をしているわけではないだろう。しかし、無意識的に自分と親との関係をモデルに親子関係を築くことで、虐待を再生産してしまう。これが無意識の「模倣」の一種である。

ここまででタルドが「模倣」という言葉を非常に広い意味で使われていることがわかったであろう。しかし、模倣から発明が生まれるといのはどういうことだろうか。タルドは社会を「発明」「闘争」「模倣」という3つの概念から分析した。ここでいう「発明」は、通常の意味よりも広い意味を持つ概念である。通常、発明というと、羅針盤や火薬、印刷機といった具体的な発明品を想像するだろう。しかし、タルドが考える「発明」はこうした発明品に留まらず、「観念や意志、判断や企図」といったものから、これらが含む「信念や欲求」といったものまで範疇に含んでいる¹⁹。そして、新しい「発明」はそれまでになされた「発明」を模倣すること、あるいはそれまでの「発明」と「闘争」することによって生まれるとタルドは考えていた。

新しい「発明」が生まれ、文化が漸次的に発展していくことを進歩 (progrès)

と呼ぶことができる。進歩に関してタルドは次のように述べている。

進歩とは、一種の集合的思考 (méditation collective) であり、固有の頭脳によってなされたわけではなく、(模倣の恩恵による、) 複数の発明家や相次ぐ発見に関して互いにやり取りをしてきた知識人たちの頭脳の連帯によって可能になった²⁰。

ここでタルドが述べていることは、ニュートンが「巨人の肩」のメタファーで伝えようとしたことと同様である。タルドの文章では、「巨人の肩」が言わんとしていたことが、「集合的思考」という言葉で表現されている。集合的思考から新たな発明が出てくる際には、ある発明と別の発明の間で「論理的結合 (l'accouplement logique)」ないし、「論理的対決 (le duel logique)」が行われるとタルドはいう。

「論理的結合」とは、「発明や発見が相互に補助しあい、蓄積していく」²¹ ことである。先述した、象徴天皇制は「論理的結合」の一例といえよう。天皇制の要素と民主主義の要素とが結びつき、新たに発明されたのが象徴天皇制という制度である。「論理的結合」では、ある発明と別の発明が共存できる。「論理的対決」とは、ある発明と別の発明との間で「闘争」が生まれることである。例えば、資本主義と社会主義の間にある闘争が挙げられる。この「論理的対決」は、どちらの発明も共存できないときに引き起こされる。このような「論理的結合」や「論理的対決」といった模倣が繰り返されることで、新たな発明が生み出されるとタルドは考えていた²²。

ここまでタルドの模倣論を確認してきた。私たち人間の文化的な営みが、「模倣」によって支えられていることが理解できただろう。コンディヤックは、人間が他の動物に比べて多様性を帯びている理由を模倣する能力ゆえと主張していた。このコンディヤックの主張は、タルドの模倣論から透かして見ることで、より一層、説得力を帯びてくる。次節では、コンディヤックやタルドの視座が

ら子どもの遊びを分析する。そして、「思考力の芽生え」を目指す幼児期の学びの中で、「模倣」がどのような役割を演じているか考察する。

5. 遊びの中の模倣

『幼稚園教育要領』等では、子どもたちの中に「思考力の芽生え」が見られる瞬間として次のような例が挙げられている。

例えば、数人の幼児たちが友達と砂場でゆるやかなV字型に樋をつなげて遊んでいるときに、片方の樋の端からバケツで水を流すと、水がもう一方の樋の方に上って流れ込むことを発見する。いつもと違う水の流れ方に興味をもち、空のペットボトルをロケットに見立てて手前の樋に置き、水を流して反対側の樋から飛び出させるという遊びに発展する。なかなかうまくいかないが、「もっとたくさん水がいるんじゃない」「ああ、今度は強すぎだ」「じゃあ、少しずつ流してみる」などと友達と考えを出し合い、水の量や流す勢いを変えながら、繰り返す。しばらく試した後、バケツ一杯にくんだ水を、始めはゆっくりと流し出し、半分ほど流したところで、勢いをつけて一気に全部流すとうまくいくことを発見する。ペットボトルは水の勢いに合わせて、始めはゆっくりと手前の樋から流れ出し、最後は勢いよく反対側の樋の先端から飛び出す²³。

この子どもたちの遊びの中でも、「模倣」は連続して行われている。例えば、空のペットボトルをロケットに見立てることは、既存の発明品であるロケットの「模倣」をしていることになる。また、ここに登場する子どもたちは、空のペットボトルが水に浮き、流れるという知識を得ていた。そうでなければ、「空のペットボトルをロケットに見立てて手前の樋に置き、水を流して反対側の樋

から飛び出させる」ことを思いつかないであろう。つまり、「片方の樋の端からバケツで水を流すと、水がもう一方の樋の方に上って流れ込む」という発見と「空のペットボトルが水に浮き、流れる」という発見が組み合わせられることで、ロケットに見立てたペットボトルを飛び出させるという新しい遊びが生まれたのである。

『もっとたくさん水がいるんじゃない』『ああ、今度は強すぎだ』『じゃあ、少しずつ流してみる』と子どもたちがいう場面では、タルドが言う「集想的思考」が形成されている。その結果、ペットボトルを飛ばすために「始めはゆっくりと流し出し、半分ほど流したところで、勢いをつけて一気に全部流すとうまくいく」という答えに子どもたちは辿り着いたのである。もし子どもたちのなかに、勾配の角度が水の流れに影響することを知っている子がいたら、結果は違ったかもしれない。例えば、すべり台の経験から勾配の角度が急だと速く滑ることができるとある子どもが知っていたとしよう。この子が、ペットボトルを飛ばそうとする子どもたちの中にいたら、「手前の樋の角度を急にしてい、奥の樋の角度なだらかにしよう」という提案をするだろう。その結果、子どもたちは水量ではなくV字の樋の角度を調整するようになる。あるいは、ペットボトルの形状・サイズに注目する子どももいるかもしれない。手元にあるペットボトルが角ばったペットボトルであれば、よりロケットに近い丸みを帯びたペットボトルを探すかもしれない。このように集想的思考に蓄積される発見が違えば、子どもたちがそこから導き出す発見も違う。

『幼稚園教育要領』等では、思考力の芽生えた子どもの姿として「新しい考えを生み出す喜びを味わい」、「自分の考えをよりよいものにする」姿が想定されていた。『幼稚園教育要領』等に記載されているペットボトルを使った遊びでは、「始めはゆっくりと流し出し、半分ほど流したところで、勢いをつけて一気に全部流すとうまくいく」という答えが、子どもたちが導き出した新しい考えである。あるいは、本稿で例示した樋の角度・ペットボトルの形状に注目して出した答えも新しい考えにあたる。いずれにせよ、これらの新しい考えが

生まれてくるには、子どもたちが「模倣」を繰り返し、「集想的思考」を作り上げるが必要になる。それゆえ、「模倣」は、学びの過程で新しい考えや自分の考えを創造することに寄与しているといえよう。

6. おわりに

本稿では、コンディヤックの思想とタルドの思想を紐解き、現代の幼児教育の文脈の中で、「模倣」が学びの過程で果たす役割について再考してきた。特に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のうち「思考力の芽生え」に焦点をあて、考察を行ってきた。そのなかで、「模倣」は「新しい考え」を生み出すためには、必要不可欠な活動であることがわかった。「新しい考え」は、0から1を生み出すようにではなく、すでにある知識や発明を組み合わせることで、あるいは否定することで生まれてくる。それゆえ、「模倣」は、一見すると対照的な「独創性」や「創造性」に繋がっているのである。

ただし、子どもたちは新しい考えを生み出すときだけ「模倣」を行なっているわけではない。例えば、周囲の人々を見て道徳性や規範意識を身につけるときも「模倣」は行われている。しかし、子どもたちが何をどのように「模倣」するかは、予測がつかないこともある。道徳的な教師を手本とし、不道徳的な教師を反面教師とするような子どももいれば、その逆もあり得る。それゆえ、教師や子どもの保護者は「模倣」が、教育上、望ましい結果をもたらすこともあれば、その反面、望ましくない結果をもたらす可能性があることを自覚しておかなければならない。

¹ 本稿で模倣と書く場合、それは通常、模倣という言葉が含んでいる意味よりも広い意味で使用している。それゆえ、本稿では通常の意味である模倣と区別するために、広義の模倣を括弧付きの「模倣」と表記する。ただし、「模倣する」というような動詞の場合については、この限りではない。

² 文部科学省『幼稚園教育要領解説』2018年、45頁。厚生労働省『保育書保育指針解説』2018年、71頁。内閣府『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』2018年、45頁。

³ 文部科学省、2018年、59頁。傍点は引用者による。

⁴ Étienne Bonnot de Condillac, *Œuvres Philosophiques de Condillac, Paris : Presses Universitaires de France, t.I, 1947, p.356*. コンディヤック『動物論：デカルトとビュフォン氏の見解に関する批判的考察を踏まえた、動物の基本的諸能力を解明する試み』古茂田宏訳、法政大学出版局、2011年、75頁。以下、コンディヤックの原著に関しては、OP, t.I, p.356. のように表記する。また原著の頁数と併せて、古茂田宏氏の邦訳の頁数も記す。ただし、訳文は引用者によるものである。

⁵ OP, t.I, p.358. 古茂田訳、2011年、85頁。

⁶ Loc. cit. 同書、85頁。

⁷ Ibid., p.359. 同書、87頁。

⁸ Loc. cit. 同書、88頁。

⁹ もちろん人間以外の動物にも模倣する傾向は見られる。顕著な例としては、宮崎県串間市幸島のニホンザルが挙げられる。幸島のニホンザルは、芋についた土を海水で洗い落とすことで知られている。芋洗いの文化を持つ、世界でも珍しいニホンザルの集団である。この芋洗い文化は幸島のニホンザルに特有であり、世代を超え継承されている。こうした文化の世代間継承でも模倣の力が働いているといえよう。以下を参照。Frans de Waal, *Are We Smart Enough to Know How Smart Animals Are?*, New York : W W Norton & Co Inc, 2016. (フランス・ドゥ・ヴァール『動物の賢さがわかるほど人間は賢いか』松沢哲郎監訳・柴田裕之訳、紀伊國屋書店、2017年。)

¹⁰ OP, t.I, p.359. 古茂田訳、2011年、88頁。

¹¹ Isaac Newton, *The correspondence of Isaac Newton*, Cambridge : the Royal Society at the Univ,v.1, 1964, p.416.

¹² ただし、「巨人の肩の上に立つ」という言葉の解釈には二通りある。1つは、大小さまざまな発見や知識の集積の上に立つという意味である。もう1つは、偉大なる科学者の発見や知識の上に立つという意味である。ニュートンの場合、後者の意味で使っている。どちらにせよ、新たな発見や知識というものが先人たちの知識の集積に支えられていることに変わりはない。そして、私たちが集積された知識を活用できるのは、ひとえに模倣する力によるところが大きい。

¹³ タルドの模倣論を教育に援用した先行研究としては、次の論文が挙げられる。松永康史・中妻雅彦「模倣による学習に関する事例研究：言語感覚を養う」『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』第5号、2015年3月、161～169頁。江川克弘「小学校教育における模倣による学習の有効性に関する研究」博士論文、2014年、大阪市立大学、大阪。

¹⁴ タルドとデュルケームの間にあった論争については、次を参照されたい。横山滋『模倣の社会学』丸善、1991年。

¹⁵ Jean - Gabriel de Tarde, *Les lois de l'imitation*, Paris : Alcan, 2eéd, 1895, p.65. タルド『模倣の法則』池田祥英・村澤真保呂訳、河出書房新社、2007年、107頁。タルドの原著に関しては、LI, p.65.のように表記する。また、原著の頁数と併せて、池田祥英氏・村澤真保呂氏の邦訳の頁数も記す。ただし、訳文は引用者によるものである。

¹⁶ 『日本国憲法』に関して、米国から押しつけられた憲法といった批判を目にすることがある。いわゆる、GHQ草案を基に『日本国憲法』が制定されたことへの批判である。その一方で、統計学者の高野岩三郎の呼びかけで結成された「憲法研究会」で作成された「憲法研究会草案」からGHQ草案が影響を受けたことは、広く知られている。「憲法研究会草案」から「GHQ草案」、そして、「GHQ草案」から「日本国憲法」というように、ここにも「模倣」の連続があるといえよう。『日本国憲法』の誕生に関しては、次を参照。国立国会図書館「日本国憲法の誕生」 < <https://www.ndl.go.jp/constitution/>

index.html > (最終閲覧日 2019 年 12 月 7 日)。

- ¹⁷ *LI*, p.67. 池田・村澤訳、2007 年、109～110 頁。傍点は引用者による。
- ¹⁸ *Ibid.*, pp.VII-VIII. 同書、11～12 頁。
- ¹⁹ *Ibid.*, p.157. 同書、214 頁。傍点は原著においてイタリックで強調されていた箇所である。
- ²⁰ *Ibid.*, p.161. 同書、217 頁。
- ²¹ *Ibid.*, p.187. 同書、246 頁。
- ²² ただし、タルドは「論理的」な模倣の他に「超論理的」な模倣も想定していた。超論理的な模倣とは、ある発明の威信やその発明を考え出した人物の人気や地位などによって発明が伝播していくような場合である。
- ²³ 文部科学省『幼稚園教育要領解説』2018 年、59～60 頁。厚生労働省『保育書保育指針解説』2018 年、86～87 頁。内閣府『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』2018 年、57 頁。